

ジャン・クリストフ

ロマン・ローラン

豊島与志雄訳

青空文庫

前がき

『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ローランは、西暦千八百六十六年フランスに生まれて、現在ではスイスの山間に住んでいます。純粋のフランス人の血すじをうけた人で、するどい知力をもっています。世界中の人々がみなお互に愛しあい、そして力強く生きてゆくこと、それが彼の理想であり、そして強く生きてゆくこと、それが彼の理想であり、そして彼はいつも平和と自由と民衆との味方であり、あります。これまでの彼の仕事は、いろいろな方面にわたっています。第一に、五つの小説があり、そのなかで

『ジャン・クリストフ』は、いちばん長いもので、そしていちばん有名です。ここに掲げたのはその中の一節です。第二に、十あまりの戯曲があり、そのなかで、フランス革命についてのものと信仰についてのものとが、重要なものです。第三に、十ばかりの偉人の伝記があり、そのなかで、ベートーヴェンとミケランゼロとトルストイとの三つの伝記は、もつとも有名です。第四に、音楽や文学や社会問題やそのほかいろいろなものについて多くの評論があります。

彼はいま、スイスの田舎に静かな生活をしながらかれ、仕事をしつづけています。そして人間はどういう風に

生きてゆくべきかということについて、かんが考えつづけています。
 (訳者)

クリストフがいる小さな町まちを、ある晩、流りゅう星せいのように通り過ぎていったえらい音楽家おんがくかは、クリストフの精神せいしんにきつぱりした影えいきよう響きやうを与えた。幼年時代ようねんじだいを通じて、その音楽家の面おもか影げは生きた手本てほんとなり、彼かれはその上うえに眼めをすえていた。わずか六歳しやうねんの少年しやうねんたる彼が、自分もまた楽曲を作ってみようと決けつ心しんしたのは、この手本もとづに基もとづいてであった。だがほんとうのこと
 をいえば、彼かれはもうずいぶん前から、知らず知らずさつきよくに作曲さつきよくし

ていた。彼が作曲し始めたのは、作曲していると自分で知るよりも前のことだったのである。

音楽家の心にとっては、すべてが音楽である。ふるえ、ゆらぎ、はためくすべてのもの、照りわたった夏の日、風の夜、流れる光、星のきらめき、雨風、小鳥の歌、虫の羽音、樹々のそよぎ、好ましい声やいとわしい声、ふだん聞きなれている、炉の音、戸の音、夜の静けさのうちに動脈をふくります血液の音、ありとあらゆるものが、みな音楽である。ただそれを聞きさえすればいいのだ。ありとあらゆるものが奏でるそういう音楽は、すべてクリストフのうちに鳴りひびいていた。彼が見たり感じたりするあらゆるものは、みな音楽に変わっていた。彼

はちようど、そうぞうしい蜂はちの巢すのようだった。しかし誰たれもそれに気づかなかつた。彼かれ自身じしんも気づかなかつた。

どの子供こどもでもするように、彼もたえず小聲こごえで歌うたっていた。どんな時ときでも、どういうことをしてゐる時ときでも、たとえば片足かたあしでとびながら往來おうらいを歩あきまわつてゐる時ときでも——祖父そふの家の床ゆかにねころがり、両手りょうてで頭かかを抱かかえて書物しょもつの挿絵さしえに見入みつてゐる時ときでも——台だい所どころのいちばんうす暗かたすみい片隅かたすみで、自分の小こさな椅子いすに坐すわつて、夜よになりかかつてゐるのに、何なにを考かんえるともなくぼんやり夢想むそうしてゐる時ときでも——彼はいつも、口くちを閉とじ、頬ほほをふくらし、唇くちびるをふるわして、つぶやくような単調たんちような音おとをもらしていた。幾時間いくじかんたつても彼はあきなかつた。母はははそれを氣きにもとめな

つたが、やがて、たまらなくなつて、ふいに叱りつけるのだった。その半ばなか夢心地ゆめごこちの状じょうたい態たいにあきてくると、彼は動きまわつて音おとをたてたくてたまらなくなつた。そういう時には、がつきよく楽曲がっきよくを作り出つくして、それをあらん限りの声こえで歌つた。自分の生活せいかつのいろいろな場合ばあいにあてはまる音楽をそれぞれこしらえていた。朝、家鴨あひるの子のようにたらい盥たらいの中をかきまわす時の音楽もあつたし、ピアノの前の腰掛こしかけに上つて、いやな稽古けいこをする時の音楽も——またその腰掛こしかけから下る時の特別とくべつな音楽もあつた。(この時の音楽おんがくはひとときかがやわ輝かがやかしいものだった。)それから、母ははが食卓しょくたくに食物を運ぶ時の音楽もあつた——その時、彼は喇叭らっぱの音で彼女をせきたてるのだった。——食堂から寢室しんしつに厳おごそかにやつ

ていく時には、元氣げんきのいい行進曲マーチを奏そうした。時によつては、二人ふたりの弟おとうとといつしよに行ぎようれつ列れつをつくつた。三人は順々じゆんじゆんにならんで、威いばつてねり歩あるき、めいめい自分の行進曲マーチをもつていた。もちろん、いちばん立派りっぱなのがクリストフのものだつた。そういう多くの音楽おんがくは、みなびつたりとそれぞれの場合ばあいにあてはまつていた。クリストフは決してそれを混同こんどうしたりしなかつた。ほかの人なら誰たれだつて、まちがえるかも知しれなかつた。しかし彼は、はつきりと音色ねいろを区別くべつしていた。

ある日、彼は祖父そふの家いえで、そりくりかえつて腹はらをつき出し、踵かかとで調子ちようしをとりながら、部屋へやの中をぐるぐるまわつていた。自分で作つくつた歌うたをやつてみながら、氣持きもちが悪わるくなるほどいつまでもま

わっていた。祖父そふはひげをそっていたが、その手をやすめて、しやぼんだらけな顔をつき出し、彼の方を眺ながめていった。

「何を歌なにってるんだい。」

クリストフは知らないと答えた。

「もう一度どやつてごらん。」と祖父そふはいった。

クリストフはやつてみた。だが、どうしてもさつきふしの節ふしが思い出せなかった。でも、祖父そふから注意ちゆういされてるのに得意とくいになり、自分のいい声をほめてもらおうと思つて、オペラのむずかしい節ふしを自己流じこりゆうにうたつた。しかし祖父そふが聞ききたいと思つてるのは、そんなものではなかった。祖父そふは口をつぐんで、もうクリストフに取りあわない風ふうをした。それでもやはり、子供こどもが隣となりの部屋へやで遊

んでいる間、部屋へやの戸を半分はんぶん開放あけはなしにしておいた。

それから数日すうじつご後のこと、クリストフは自分のまわりに椅子いすを
 まるくならべて芝居しばいへいった時のきれぎれな思い出おもをつなぎあわ
 せて作った音楽劇おんがくげきを演えんじていた。まじめくさった様子ようすで、芝居しばい
 で見た通り、三拍子曲ミニユエットの節ふしにあわせて、テーブルの上うえにかかつて
 いるベートーヴェンの肖しょうぞう像ぞうに向かい、ダンスの足どりや敬けいれ
 礼いをやっていた。そして爪先つまさきでぐるっとまわって、ふりむく
 と、半開はんびらきの扉ドアの間あいだから、こちらを見ている祖父そふの顔が見えた。
 祖父に笑わらわれているような気がした。たいへんきまりが悪わるくなつて、
 ぴたりと遊あそびを止やめてしまった。そして窓のところへ走はつていき、
 ガラスに顔を押おしあてて、何かを夢中むちゆうで眺ながめてるような風ふうをし

た。しかし、祖父そふは何ともいわないで、彼の方へやって来て抱だいてくれた。クリストフには祖父そふが満足まんぞくしているのがよくわかった。彼は小さな自尊心じそんしんから、そういう好意こういがうれしかった。そしてかなり機敏きびんだったので、自分じぶんがほめられたのをさとった。けれども、祖父そふが自分のうちの何を一番ほめたのか、それがよくわからなかった。戯曲家ぎきよくかとしての才能さいのうか、音楽家おんがくかとしての才能さいのうか、歌い手としての才能か、または舞踊家ぶようかとしての才能か。彼はそのいちばんおしまいのものだと思いたかった。なぜなら、それを立派りっぱな才能さいのうだと思っていたから。

それから一週しゅうかん間かんたつて、クリストフがそのことをすっかり忘わすれてしまった頃、祖父そふはもったいぶった様子ようすで、彼に見せるも

のがあるといった。そして机つくえをあけて、中から一冊さつの楽譜帖がくふちようをとり出し、ピアノの楽譜台がくふだいにのせて、弾ひいてごらんといった。

クリストフは大変困こつたが、どうかこうか読み解といていった。その楽譜がくふは、老人ろうじんの太い書体しよたいで特別とくべつに念ねんをいれて書いてあつた。最初さいしよのところには輪りんや花形はながたの飾かざりがついていた。——祖父はクリストフのそばそばに坐すわつてページをめくつてやつていたが、やがて、それは何なにの音楽おんがくかと尋たずねた。クリストフは弾ひくのに夢むちゆう中ちゆうになつていて、何を弾ひいてるのやらさっぱりわからなかつたので、知らないしらないと答こたえた。

「気きをつけてごらん。それがわからないかね。」

そうだ、たしかに知っているしると彼は思おもつた。しかし、どこで聞

いたのかわからなかった。……祖父は笑っていた。

「かんが考えてごらん。」

クリストフは頭をふった。

「わからないよ。」

ほんとうをいえば、思いあたることがあるのだった。どうもこの節は……という気がした。だがそうだとはいきれなかった。……いいいたくなかった。

「お祖父さん、わからないよ。」

彼は顔を赤らめた。

「ばかな子だね。自分のだということがわからないのかい。」
たしかにそうだとは思っていた。けれどはつきりそうだと聞く

と、はつとした。

「ああ、お祖父さん。」

老人は顔を輝かしながら、クリストフにその楽譜を説明してやった。

「これは詠唱曲だ。火曜日にお前が床にねころんでうたっていた

あれだ。それから、行進曲。先週だったね、もう一度やって

ごらんといいても、思いだせなかつたろう、あれだ。それから三

拍子曲。肱掛椅子の前で踊っていた時の歌だ。……みてごらん

。」

表紙には、見事な花文字で、こう書いてあった。

少年時代の快樂——詠唱曲、三拍子曲、円舞曲、行進曲。
 ジャン・クリストフ・クラフト作品I。

クリストフは目がくらむような気がした。自分の名前、立派な
 表題、大きな帖面、自分の作品！これがそうなんだ。
 ……彼はまだよく口がきけなかった。

「ああ、お祖父さん！お祖父さん！……」

老人は彼を引寄せた。クリストフはその膝に身体を投げかけ、
 その胸に顔をかくした。彼は嬉しくて真赤になつていた。老人
 は子供よりもっと嬉しかったが、わぎと平気な声で——感動し
 かけてることに自分でも気づいていたから——いった。

「もちろん、お祖父さんが伴奏をつけたし、また歌の調子に和声を入れておいた。それから……（彼は咳をした）……それから、三拍子曲に中間奏部をそえた。なぜって……なぜって、そういう習慣だからね。それに……とにかく、悪くなつたとおもうは思わないよ。」

老人はその曲を弾いた。——クリストフは祖父と一しよに作曲したことが、ひどく得意だった。

「でも、お祖父さん、お祖父さんの名前も入れなきやいけないよ。」

「それには及ばないさ。お前よりほかの人に知らせる必要はない。ただ……（ここで彼の声はふるえた）……ただ、あとで、お

祖父さんがもういなくなつた時、お前はこれを見て、年とつたお祖父さんのことを思い出してくれるだろう、ねえ！ お祖父さんを忘れやしないね。」

「憐れな老人は思つてることをすつかりいえなかつた。彼は、自分よりも長い生命があるに違いないと感じた孫の作品の中に、自分のまずい一節をはさみ込むという、きわめて罪のない楽しみを、おさえることができなかつたのである。けれども、今から想像される孫の光栄に一しよに加わりたいというその願いは、ごくつつましい哀れなものだつた。彼は自分が全く死にうせてしまわないようにと、自分の思想の一片を自分の名もつけずに残しておくだけで、満足していたのである。——クリストフは、

ひどく感動かんどうして、老人ろうじんの顔にやたらに接吻せつぶんした。老人はさ
らに心を動かされて、彼の頭あたまを抱きしめた。

「ねえ、思い出おもしてくれるね。これから、お前まへが立派りっぱな音楽家おんがくか
になり、えらい芸術家げいじゆつかになって、一家の光栄こうえい、芸術の光栄こうえい、
祖国そこくの光栄こうえいとなった時、お前まへが有名ゆうめいになった時、その時になっ
て、思い出おもしてくれるだろうね、お前まへを最初さいしょに見出みし、お前まへの
将来しょうらいを予言よげんしたのは、この年としとつたお祖父じいさんだったとい
うことをね……」

その日ひ以来いらい、クリストフはもう作曲家さつきよくかになったのだったから、
作曲さつきよくにとりかかった。まだ字じを書くかことさえよく出来できないう

ちから、家計簿の紙をちぎりとつては、いろいろな音符を一生懸命書きちらした。けれども、自分がどんなことを考えているかそれを知るために、そしてそれをはつきり書きあらわすために、あまり骨折つていたので、ついには、何か考えてみようとするだけで、もう何も考えなくなってしまった。それでも彼は、やはり楽句（楽曲の一節）を組みたてようとりきんでいた。そして音楽の天分がゆたかだったので、まだ何の意味も持たないものではあつたけれど、ともかくも楽句をこしらえ上げることができた。すると彼は喜び勇んで、それを祖父のところへ持つていった。祖父は嬉し涙をながし——彼はもう年をとつていたので涙もろかつた——そして、素晴らしいものだといつてくれた。

そんなふうには、彼はすっかり甘やかされてだめになるところだった。しかし幸なことに、彼は生まれつき賢い性質だったので、ある一人の男のよい影響をうけて救われた。その男というのは、ほかの人に影響を与えるなどとは自分でも思っていないなかつたし、誰が見ても平凡な人間だった。——それはクリストフの母親ルイザの兄だった。

彼はルイザと同じように小柄で、痩せていて、貧弱で、少し猫背だった。年のほどはよくわからなかつた。四十をこしている筈はなかつたが、見たところでは五十以上に思われた。皺のよつた小さな顔は赤みがかつて、人のよさそうな青い眼が色のさめかけた瑠璃草のような色合だった。隙間風がきらいで、ど

ところで寒さむそうに帽子ぼうしをかぶっていたが、その帽子をぬぐと、円え
 錐形んすいけいの赤い小さな禿はげ頭あたまがあらわれた。クリストフと弟おとうとたち
 はそれを面白おもしろがった。髪かみの毛はどうしたのと聞いてみたり、父ちち
 親ちおやメルキオルの露骨ろこつな常じょうだん談だんにおだてられて、禿はげをたたくぞ
 とおどしたりして、いつもそのことで彼かれをからかつてあきなかつ
 た。すると小父おじはまっさきに笑わらいだし、されるままになつて少し
 も怒おこらなかつた。彼はちつぽけな行ぎやう商しょう人にんだつた。香かうり料りやう、
 紙類しるい、砂糖菓子さとうがし、ハンケチ、襟えり巻まき、履物はきもの、缶詰かんづめ、曆こよみ、小唄こなげ、
 集あつ、薬類やくいなど、いろんなものはいつてる大きな梱こりを背負せおつて、
 村むらから村へと渡り歩わたいていた。家の人たちは何度なんども、雑貨屋ざつかやや小
 間物屋まものやなどの小さな店を買かつてやって、そこにおちつくようにす

すめたことがあつた。しかし彼は腰をすえることが出来なかつた。
よなか夜中に起おき上あがつて、戸の下に鍵かぎをおき、梱こりをかついで出ていつて
 しまうのだった。そして幾いくつき月も姿を見せなかつた。それからま
もとた戻つてきた。夕ゆうがた方、誰かが戸にさわる音がする。そして戸が
 少しあいて、行儀ぎようぎよく帽子ぼうしをとつた小さな禿はげ頭あたまが、人のい
 い目つきとおずおずした微笑びしょうと共にあらわれるのだった。「皆
 さん、今晚は。」と彼かれはいつた。はいる前によく靴くつをふき、みん
ひとりひとりとしなに一人一人年の順に挨拶あいさつをし、それから部屋へやのいちばん末座まつざ
 にいつて坐つた。そこで彼はパイプに火をつけ、背せをかがめて、
 いつものひどい悪洒落わるじゃれがすむのを、静かに待まつのであつた。ク
そふリストフの祖父と父は、彼あざけを嘲りあざけぎみに軽蔑けいべつしていた。そのち

つぽけな男がおかしく思われたし、行商人という賤しい身分に自尊心を傷つけられるのだった。彼等はそのことをあからさまに見せつけたが、彼は気づかない様子で、彼等に深い敬意をしめしていた。そのため、二人の気持はいくらか和いだ。ひとから尊敬されるとそれに感じ易い老人の方は、殊にそうだった。二人はルイザがそばで顔を真赤にするほどひどい常談を浴せかけて、それで満足した。ルイザはクラフト家の人たちの優れていることを文句なしにいつも認めていたから、夫と舅が間違っているなどとは夢にも思っていなかった。しかし、彼女は兄をやさしく愛していたし、兄も口には出さないが彼女を大切にしていた。彼等は二人きりでほかに身寄の者もなかった。二人とも

生活のためにひどく苦勞くろうして、やつれはてていた。人知れず忍しのんできた同じような苦くるしみとお互たがいの憐あわれみの氣持きもちとが、悲しいやさしきをもつて二人を結むすびつけていた。生いきるように、楽しく生きるように頑固がんこに出来上つて、丈夫じょうぶな騒そうぞう々あしい荒あらつぽいクラフト家けの人たちの間にあつて、いわば人生の外側そとがわか端はしつこにうち捨てられてるこの弱よわい善ぜんりりよう良りな二人ふたりは、今までお互ことに一言も口には出ださなかつたが、互たがいに理り解かいしあい憐あわれみあつていた。

クリストフは子供こどもによく見られる思おもいやりのない輕率けいそつさで、父ちちや祖父そふの真似まねをして、この小さい行商ぎやうしようにん人ひとをばかにしていた。おかしな玩具がんぐかなんかのようように彼かれを面白おもしろがつたり、悪わるふざけをしてからかつたりした。それを小父おじ（小さい行商人）はおちつ

き払って我慢がまんしていた。でもクリストフは、知らず知らずに彼を好すいてるのだった。第一に、思うままになるおとなしい玩具がんぐとして、彼が好すきだった。それからまた、いつも待ちがいのあるいいもの、菓子かしとか絵えとか珍めずらしい玩具などを持つて来てくれるから、好すきだった。この小さい男が戻もどつて来ると、思いがけなく何か貰もらえるので、子供たちはうれしがった。彼は貧びんぼう乏わだったけれど、どうにか工面くめんして一人一人に土産物みやげものを持つて来てくれた。また彼は家の人たちの祝いわい日を一度も忘わすれることがなかった。誰だれかの祝いわい日になると、きつとやってきて、心をこめて選えらんだかわいわい贈おくりもの物をポケットからとりだした。誰だれもお礼をいうのを忘わすれるほどそれに馴なれきつていた。彼の方ほうでは、贈おくりもの物ものをすることが

うれしくて、それだけでも満足まんぞくしてらしかつた。けれど、クリストフはいつも夜よるよく眠れないで、夜の間に昼間ひるまの出来事できごとを思いかえしてみる癖くせがあつて、そんな時に、小父おじはたいへん親しんせ切つな人だと考え、その憐あわれな人に対する感謝かんしゃの気持きもちがこみ上げて来るくのだった。しかし昼ひるになると、また彼をばかにすることばかり考えて、感謝かんしゃの様子などは少しすこも見せなかつた。その上、クリストフはまだ小ちいさかつたので、善ぜん良りであるということの価値かちが十分にわからなかつた。子供こどもの頭あたまには、善良と馬鹿とは、だいたい同じ意味いみの言葉と思おもわれるものである。小父おじのゴツトフリートは、その生いきた証しょうこ拠このようだった。

ある晩ばん、クリストフの父が夕食をたべに町に出でかけた時、ゴツ

トフリートは下の広間ひろまに一人残っていたが、ルイザが二人の子供ふたりをねかしている間あいだに、外に出てゆき、少し先の河岸かしにいつて坐すわつた。クリストフはほかにすることもなかつたので、あとからついていった。そしていつもの通り、子犬こいぬのようにじやれついていじめた揚句あげく、とうとう息を切きらして、小父おじの足もとの草くさの上にねころんだ。腹はらばいになつて芝生しばふに顔をうずめた。息切れがとまると、また何か悪わるく口くちをいつてやろうと考かんえた。そして悪口わるくちが見つかつたので、やはり顔を地面じべたに埋うずめたまま、笑わらいこけながら大おお声ごえでそれをいつてやった。けれど何なんの返事へんじもなかつた。それでびつくりして顔かおを上げ、もう一度どそのおかしな常じょうだん談だんをいつてやろうとした。すると、ゴットフリートの顔かおが目めの前まへにあつた。その顔

は、金色の靄のなかに沈んでゆく夕日の残りの光に照らされていた。クリストフの言葉は喉もとにつかえた。ゴットフリートは目を半ばとじ、口を少しあけて、ぼんやり微笑んでいた。そのなやましげな顔には、何ともいえぬ誠実さが見えていた。クリストフは頬杖をついて、彼を見守りはじめた。もう夜になりかかっていた。ゴットフリートの顔は少しずつ消えていった。あたりはひっそりとしていた。ゴットフリートの顔にうかんでる神秘的な感じに、クリストフも引きこまれていった。地面は影におおわれており、空はあかるかった。星がきらめきだしていた。河の小波が岸にひたひた音をたてていた。クリストフは気がぼうとして来た。目にも見ないで、草の小さな茎をかみきっていた。

蟋蟀こおろぎが一匹ひきそばで鳴なっていた。彼は眠ねむりかけてるような気持きもちだつた。

と突然とつぜん、暗くらいなかで、ゴツトフリートが歌うたいだした。胸むねの中なかで響ひびくようなおぼろな弱よわい声こゑだった。少しはなれてたら、聞ききとれなかつたかも知れない。しかしその声には、人の心を打うつ誠まことがこもつていた。声に出だして考かんがえているのかと思おもえるほどだった。ちようど透すきとおつた水みづを通して見るように、その音おんがく樂がくを通とおして彼の心の奥おく底そこまでも読よみとられそうだった。クリストフはこれまで、そんな風ふうな歌うたい方かたをきいたことがなかつた。またそんな歌うたを聞きいたこともなかつた。ゆるやかな単たんじゆん純じゆんな幼稚ようちな歌うたで、重おも々おもしい寂さびしげな、そして少し単たんちよう調てうな足あしどりどりで、決いそして急いそが

ずに進んでゆく——時々長い間やすんで——それからまた行方も
かまわず進み出し、夜のうちに消えていった。ごく遠いところか
らやって来るようでもあるし、どこへ行くのかわからなくもあつ
た。朗かではあるが、なやましいものがこもっていた。表面は平
和だったが、下には長い年月のなやみがひそんでいた。クリス
トフはもう息もつかず、身体を動かすことも出来ないで、感動の
あまり冷たくなっていた。歌が終わると、彼はゴットフリートの
方へはい寄った。そして喉をつまらした声でいいかけた。

「小父さん！……」

ゴットフリートは返事をしなかった。

「小父さん！」とクリストフはくりかえして、両手と顎を彼の膝

にのせた。

ゴットフリートはやさしい声でいった。

「何^{なん}だい……」

「それ何^{なん}なの、小父^{おじ}さん。教^{おし}えてよ。小父^{おじ}さんが歌ったのなあと
？」

「知らないね。」

「何^{なん}だか教^{おし}えとくれよ。」

「知らないよ。歌だよ。」

「小父^{おじ}さんの歌かい。」

「おれのなもんか、ばかな……古い歌だよ。」

「誰^{だれ}がつくったの？」

「わからないね。」

「いつ出来たの？」

「わからないね。」

「小父おじさんの小さい時じぶん分にかい？」

「おれが生まうまれる前まえだ。おれのお父とうさんが生まれる前、お父さん

のお父さんが生まれる前、お父さんのお父さんのそのまたお父さ

んが生まれる前だ……。この歌うたはいつでもあつたんだよ。」

「変へんだね！ 誰だれにもそんなこと聞いたことがないよ。」

彼かれはちよつと考えた。

「小父おじさん、まだほかのを知つてる？」

「ああ。」

「もう一つ歌って。」

「なぜもう一つ歌うんだい？ 一つで沢山たくさんだよ。歌いたい時に、歌わなくちやならない時に、歌うものなんだ。面白半分おもしろはんぶんに歌

つちやいけない。」

「でも、音楽おんがくをつくる時はどうなの？」

「これは音楽じゃないよ。」

子供こどもは考えこんだ。よくわからなかった。けれど説明せつめいしても
らわなくてもよかった。なるほど、それは音楽おんがくではなかった。

普通の歌ふつうみたいなのに音楽ではなかった。彼はいった。

「小父おじさん、小父さんはつくったことある？」

「何をさ。」

「歌を。」

「歌？ どうして歌をつくるのさ。歌はつくるものじゃないよ。」

子供こどもはいつもの論法ろんぽうでいいはった。

「でも、小父おじさん、一度どは誰だれかがつくったにちがいないよ。」

ゴットフリートは頑がんとして頭ふを振った。

「いつでもあつたんだ。」

子供こどもはいい進すすんだ。

「だって、小父おじさん、ほかの歌を、新しい歌を、つくすることは出で

来きるんじゃないか。」

「なぜつくるんだ。もうどんなのでもあるんだ。悲かなしい時ときのもしあ

れば、嬉うれしい時ときのもしあある。疲つかれた時ときのもしああれば、遠いい家いえのことを

思う時もある。自分がいやしい罪人つみびとだったからといって、まるで虫むしけらみたいなものだったからといって、自分の身じぶんがつくづくいやになった時もある。ほかの人が親切しんせつにしてくれなかつたからといって、泣なきたくなつた時もある。天気がよくて、いつも親切わらに笑わらいかけて下さる神様かみさまのような大空おおぞらが見えるからといって、楽しくなつた時もある。……どんなのでも、どんなのでもあるんだよ。何なんでほかのをつくる必要ひつようがあるものか。「偉えらい人になるためにさ……」と子供こどもはいった。彼の頭は、祖父そふの教おしえと子供らしい夢ゆめとで一ぱいになつていた。

ゴットフリートは穏おだやかに笑わらつた。クリストフは少しむつとして尋たずねた。

「なぜ笑うんだい！」

ゴットフリートはいった。

「ああ、おれは、おれはつまらない人間さ。」

そして子供の頭をやさしく撫でながらきいた。

「お前は、偉い人になりたいんだね？」

「そうだよ。」とクリストフは得意げに答えた。

彼はゴットフリートがほめてくれるだろうと思っていた。しかしゴットフリートはきき返した。

「何のためにだい？」

クリストフはまごついた。そして、ちよつと考えてからいった。

「立派な歌をつくるためだよ。」

ゴットフリートはまた笑った。そしていった。

「偉い人になるために歌をつくりたいんだね。そして、歌をつくるために偉い人になりたいんだね。それじゃあ、尻尾を追っかけぐるぐるまわってる犬みたいだ。」

クリストフはひどく気にさわった。ほかの時だったら、いつもばかにしている小父からあべこべにばかにされるなんて、我慢が出来なかつたかもしれない。それにまた理窟で自分をやりこめるほどゴットフリートが利口だなどとは、思いもよらないことだった。彼はやり返してやる議論か悪口を考えたが、思いあたらなかつた。ゴットフリートは続けていった。

「もしお前が、ここからコブレンツまであるほど大きな人物に

なつたところで、たった一つの歌もつくれやすまい。」

クリストフはむつとした。

「つくろうと思つても……」

「思えば思うほど出来なくなるんだ。歌をつくるには、あの通りでなくちやいけない。おききよ……」

月は野の向こうに昇つて、まるく輝いていた。銀色の靄が、地面とすれすれに、また鏡のような水面に漂っていた。蛙が語りあつていた。牧場の中には、美しい調子の笛のような暮のなぐ声が聞えていた。蟋蟀の鋭い顫え声は、星のきらめきに答えてるかのようだった。風は静かに榛の枝をそよがしていた。河の向こうの丘からは、鶯のか弱い歌がひびいてきた。

「いったいどんなものを歌う必要があるのか？」ゴットフリートは長い間黙だまつていてから、ほつと息いきをしていった。——（自分じぶんに向かつていつているのか、クリストフに向かつていつているのか、よくわからなかった。）——「お前まえがどんな歌うたをつくろうと、ああいうものの方が一ほうそう立派りっぱに歌っているじゃないか。」

クリストフはこれまで何度なんども、それらの夜よるの声を聞いていた。しかしまだこんな風ふうに聞いたことはなかった。本ほん当とうだ、どんなものを歌う必ひつ要ようがあるか？……彼はやさしさと悲かなしみで胸むねが一ぱいぱいになるのを感じかんじた。牧場まきばを、河を、空を、なつかしい星ほしを、胸むねに抱だきしめたかった。そして小父おじのゴットフリートに対たいして、しみじみと愛あい情じょうを覚おぼえた。もう今は、すべての人のうちで、

ゴットフリートがいちばんよく、いちばん賢く、いちばん立派りっぱに
 思われた。彼は小父おじをどんなに見違まちがえていたことかと考えた。自じ
 分ぶんから見違まちがえられていたために、小父は悲かなしんでいるのだと考え
 た。彼は後悔こうかいの念ねんにうたれた。こう叫さけびたい気がした。「小父
 さん、もう悲しまないでね。もう意地悪いじわるはしないよ。許ゆるしておく
 れよ。僕は小父おじさんが大好きだ！」しかし彼かれはいえなかつた。――
 ーそしていきなり小父おじの腕うでの中にとびこんだ。言葉は出でなかつた。
 彼はただくり返かえした。「僕ぼくは小父おじさんが好きすきだ！」そして心をこ
 めて抱だきついた。ゴットフリートはびつくりし、感かん動どうして、
 「何なんだ、何なんだ？」とくり返かえしながら、同おなじように彼を抱だきしめた。
 ーそれから彼かれは立たち上あがり、子こ供どもの手をとっていった。「もう家うち

へかえろう。「クリストフは自分の氣持じぶん きもちが小父おじにはわからなかつたのではないかしらと、また悲かなしい氣持になつた。しかし家うちのところまで来ると、小父はいつた。「また晩ばんに、お前まへさえよかつたら、一しよに神かみさま様の音おんがく樂をききに行こう。もつとほかの歌うたも歌つてあげよう。」そしてクリストフは、感かんじや謝の氣持きもちで一ぱいぱいになつて、おやすみの挨拶あいさつをしながら、抱だきついた時、小父がよくわかってくれたのを見てとつた。

それいらい以来、二人ふたりは夕ゆう方がた、しばしば一しよに散步さんぽに出でかけた。黙だまつて歩いて、河がに沿そつていったり、野のを横切よこぎつたりした。ゴツトフリートはゆつくり煙草たばこをすい、クリストフは夕ゆう闇やみが怖こわくて、小父おじに手をひかれていた。彼等かれらはよく草の上すわに坐つた。ゴツトフ

リートはしばらく黙^{だま}つてたあとで、星^{ほし}や雲^{くも}の話^{はなし}をしてくれた。土^{つち}
 や空^{くう}気^きや水^{みづ}のいぶき、または闇^{やみ}の中^{なか}にうごめいてる、飛^とんだりは
 ったり泳^{およ}いだりしている小^{ちひ}さな生^{いき}物^{もの}の、歌^{うた}や叫^{さけ}びや音^ね、または
 晴^{せい}天^{てん}や雨^{あめ}の前^{ぜん}兆^{ちよう}、または夜^{よる}の交^{シン}響^{フオ}曲^{ニー}の数^{かず}えきれないほど
 の樂^が器^{つき}など、それらのものを一々聞^ききわけ^{ける}ことを教^{おし}えてくれた。
 時^{とき}とすると、歌^{うた}もうたつてくれた。悲^{かな}しい節^{ふし}の時^{とき}も楽^{たの}しい節^{ふし}の時^{とき}
 もあつたが、しかしいつも同^{おな}じよう^な種^{しゆ}類^{るい}のものだつた。そし
 てクリストフはいつも同^{せつ}じ切^{せつ}なさ^を感^{かん}じた。ゴツトフリートは一
 晩^{ばん}に一つきり歌^{うた}わなかつた。頼^{たの}んでも気^き持^{もち}よく歌^{うた}つてはくれな
 いことを、クリストフは知^しっていた。歌^{うた}いたい時^{とき}に自^し然^{ぜん}に出^でてくる
 のでなくてはだめだつた。長い間^ま待^{まち}つていなければならぬこと

が多かつた。もう今夜は歌わないんだな……とクリストフが思つてる頃、やつと小父は歌い出すのだった。

ある晩、ゴットフリートがどうしても歌つてくれそうもなかつた時、クリストフは自分が作つた小曲を一つ彼に聞かしてやろうと思いついた。それは作るのに大へん骨が折れたし、得意なものであつた。自分がどんなに芸術家であるか見せてやりたかつた。ゴットフリートは静かに耳を傾けた。それからいつた。

「実にまずいね、気の毒だが。」

クリストフは面目を失つて、答える言葉もなかつた。ゴットフリートは憐れむようにいつた。

「どうしてそんなものを作つたんだい。どうにもまずい。誰もそ

んなものを作れとはいわなかったらうにね。」

クリストフは怒おこって赤くなり、いいさからった。

「お祖父じいさんは僕の音おんがく樂をたいへんいいといってるよ。」と彼は叫さけんだ。

「そう！」とゴットフリートは平へい氣でいった。「お祖父じいさんのいうことが本ほん当とうなんだろう。あの人はたいへん学がく者しやだ。音樂のことは何なんでも知っている。ところがおれは、音樂のことはあまり知らないんだ。」

そして少し間まをおいていった。

「だが、おれは、たいへんまずいと思うよ。」

彼かれはおだやかにクリストフを眺ながめ、その不ふ機き嫌げんな顔を見て、微ほ

笑^{ほえ}んでいった。

「何^{なに}かほかに作^{つく}ったのがあるかい？　今のより外^{ほか}のものの方が、おれの気^きにいるかも知れない。」

クリストフはほかの歌^{うた}が小父^{おじ}の感じをかえてくれるかも知れないと思つて、あるだけ歌^{うた}った。ゴットフリートは何^{なん}ともいわなかつた。彼はおしまいになるのを待^まっていた。それから頭^ふを振^ふつて、ふかい自信^{じしん}のある調^{ちようし}子^しでいった。

「なおまずい。」

クリストフは唇^{くちびる}をかみしめた。顎^{あご}がふるえていた。彼^{かれ}は泣^なきたかつた。ゴットフリートは自分でもまごついてるようによいはいはつた。

「実にまずい。」

クリストフは涙なみだ声こゑで叫さけんだ。

「では、どうしてまずいというんだい？」

ゴットフリートはあからさまの眼めつきで彼を眺ながめた。

「どうしてって……おれにはわからない……お待ちよ……じつさ

いまずい……第一、ばかっているから……そうだ、その通りだ……

……ばかっている、何なんの意味いみもない……そこだ。それを書いた時、

お前は何なにも書かきたいことがなかったんだ。なぜそんなものを書い

たんだい？」

「知らないよ。」とクリストフは悲かなしい声でいった。「ただ美うつくし

い曲きょくを作つくりたかったんだよ。」

「それだ。お前は書くために書いたんだ。偉い音楽家になりたくて、人にほめられたくて、書いたんだ。お前は高慢だった、お前は嘘つきだった、それで罰をうけた……そこだ。音楽では、高慢になって嘘をつけば、きつと罰があたる。音楽は謙遜で誠実でなくてはならない。そうでなかつたら、音楽というのは何だ？ 神様に対する不信だ、神様をけがすことだ、正直な真実なことを語るために、われわれに美しい歌を下さった神様をね。」

彼はクリストフが悲しがってるのに気がついて、抱いてやろうとした。しかしクリストフは怒って横を向いた。そして彼は幾日も不機嫌だった。小父を憎んでいた。——けれども、「あい

つはばかだ、なんにも知るもんか！　ずっと賢いお祖父さんが、僕の音楽をすてきだといつてくれてるんだ。」といくら自分でくり返してみてもだめだった。心の底では、小父の方が正しいとわかっていた。ゴットフリートの言葉が胸の奥に刻みこまれていた。彼は嘘をついたのがはずかしかった。

それで、彼はしつっこく怨んではいたものの、作曲をする時には、今ではいつもゴットフリートのことを考えていた。そしてしばしば、ゴットフリートがどう思うだろうかと考えると、はずかしくなつて、書いたものを破いてしまうこともあった。そういう気持ちをおしきつて、全く誠実でないとわかっている曲を書くような時には、気をつけてかくしておいた。どう思われるだろ

うかとびくびくしていた。そしてゴットフリートが、「そんなに
まずくはない……気にいった……」とただそれだけでもいつてく
れると、嬉しくてたまらなかつた。

また、時には意趣がえしに、偉い音楽家の曲を自分のだと嘘を
いつて、たちのわるい悪戯をすることもあつた。そして小父が
たまたまそれをけなしたりすると、彼はこおどりして喜んだ。し
かし小父はまごつかなかつた。クリストフが手をたたいて、喜ん
でまわりをはねまわるのを見ながら、人がよさそうに笑っていた。
そしていつもの意見をもち出した。「うまくは書いてあるかも知
れないが、何の意味もない。」——彼はいつも、クリストフの家
で催おされる小演奏会に出席したがらなかつた。その時

の音楽おんがくがどんなに立派りっぱなものであつても、彼は欠伸あくびをしだし、
 退屈たいくつでぼんやりしてゐる様子ようすだった。やがて辛抱しんぼう出来なくなり、
 こつそり逃にげ出だしてしまふのだつた。彼はいつもいつていた。
 「ねえ、坊ぼうや、お前まえが家いえの中で書かくものは、どれもこれも音楽おんがく
 じゃないよ。家の中の音楽は、部屋へやの中の太陽たいようと同じだ。音楽
 は家いえの外そとにあるものなんだ、外で神様のさわやかな空気くうきを吸すう時とき
 なんか……。」

あとがき

クリストフはその後ご、偉えらい音楽家おんがくかになりました。彼かれ
 の音楽おんがくはいつも、彼かれの思想しそうや感かん情じようをありのままに

表^{ひょうげん}現^{げん}したもので、彼の心^{かれ}とじかにつながってるものでありました。そして彼^{かれ}がえらい音楽家^{おんがくか}になったのは、ゆたかな天分^{てんぶん}と苦^{くる}しい努力^{どりよく}とによるのですが、また幼^{おきな}い時^{とき}にゴットフリートから受^うけた教訓^{きょうくん}は、ふかく心^{こころ}にきざみこまれていて、たいへん彼^{かれ}のためになりました。

青空文庫情報

底本：「日本少国民文庫 世界名作選（一）」新潮社

1998（平成10）年12月20日発行

底本の親本：「世界名作選（一）」日本少国民文庫、新潮社

1936（昭和11）年2月8日

入力：川山隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

ロマン・ローラン

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 豊島与志雄訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>